



いわさきちひろ「とても素朴なだけけれどたいせつなもの、それが絵本の中にはあるんです。」

●2026年5月15日(金)~7月20日(月・祝)

主催：ちひろ美術館

後援：絵本学会、(公社)全国学校図書館協議会、(一社)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、杉並区教育委員会、西東京市教育委員会、練馬区

平和で、豊かで、美しく、可愛いものがほんとうに好きで、そういうものをこわしていこうとする力に限りない憤りを感じます。今の世の中、いろんなものが失われていってでしょう。とても素朴なだけけれどたいせつなもの、それが絵本の中にはあるんです。

私のひととき——「素朴なだけ大切なものを描きたい」 1972年

ちひろは生前、日記や手帳、エッセイなどに多くのことばを遺しました。そこには、創作への信念や家族への思いなどがつづられています。年代を追って、絵とことばを合わせて見ると、移り変わる時代のなかで模索しながら、自らの表現を見出していく姿が浮かび上がります。

情熱、再び

戦いがおわった日、心のどこかがぬくぬく燃え、生きていく喜びがあふれだした。忘れていた幼い日の絵本の絵を思いだし、こどものころのように好きに絵を描きだした。

「絵本と私」絵雑誌「こどものせかい」第20巻11号(至光社) 1968年

幼いころから絵を描くことが好きで、女学校時代には洋画を学んでいたちひろは、画家になりたいと願いますが、戦争により一度はその夢をあきらめています。

1945年夏、両親の郷里・信州で終戦を迎えたちひろは、翌年、松本公会堂で行われた共産党演説会に参加します。そこで戦争の実態を知るとともに、反戦を唱えて投獄された人がいたことに感銘を受け、自らの生き方を真剣に考え始めます。

この年の5月、ちひろは党宣伝芸術学校に入学するために上京し、再び画家への道を歩み始めます。同年、人民新聞社に



図1 自画像(27歳) 1946年

職も得て、文も絵もかく記者として仕事を始めました。翌年には「働く婦人」や「労働戦線」で女性が働く現場を記事にし、強い共感を寄せています。前衛美術会や日本美術会に入会し、社会派リアリズムなどの当時の先鋭的な動向を学びながら、美術展にも出品する一方、日本童画会に入会して童画家としても活動を始めました。当時の自画像(図1)には、自力で道を拓こうとする若き日のちひろの姿を見ることができます。

1950年、松本善明と結婚、翌年には長男・猛が生まれました。多忙を極めるなかでも、家族との暮らしや子育てを通し



図2 「いぬのあかちゃん」 1953年

て得た実感は、新たな表現へと向かう礎となります。

子どもを描く

私は、工場の勤労者の生活は深く知らないかもしれませんが、母と子の姿なら知っています。私も、子をもつ母親だからです。迷うことなく、スッキリした、ある意味では少々モダンなものを、思いきって描こうと決心して、絵筆をとりました。そして、おもいました——これからは、「ドロ臭さをださなければ」などと苦しむのは、もう、やめよう。

「表紙絵について」雑誌「子どものしあわせ」(あすなろ書房) 1963年

1955年11月の「日本童画会会報」で、「童画に於けるモダニズムについてどうお考えですか」との問いに対し、ちひろは「近頃の画壇のモダニズムは、もうゆきつくところへ、いったという感じがいたします。それを通過した新しいリアリズムを童画の中に生かしてゆきたいものと私は思います」と語り、母として見つめた子どもの姿を描くことへと向かっていきます(図2)。1963年から描き始めた雑誌「子どものしあわせ」の表紙絵(図3)の仕事は、大きな転機となりました。子どもをテーマに自由に描くことができた仕事を通して、写実的でなくとも、自分が感じる「夢を持った、美しい子ども」の姿は、人々の共感を得ることができるとの確信に至っています。

アンデルセン童話の普遍性

およばずながら、わたしも長い生命をもった、童画家でありたいと思う。さざなみのような画風の流行に左右されず、何年も読みつづけられる絵本を、せつにかきたいと思う。

「童画とわたし」「なかよしだより」455号(講談社) 1964年

図4 船を見つめる人魚姫
『にんぎょひめ』(偕成社)より 1967年図3 スイートピーとフリージアと少女
1963年

1950年代から60年代にかけて、数多くの童話集が刊行され、ちひろも毎年のように童話集の仕事を手がけました。たくさん童話のなかでも「詩のようにことばの短く、うつくしく、いろいろなことを思いうかべることのできる」童画が好きと語っていたちひろは、人の世の悲しみや現実、心のひだを描き、時代や国境をも越えた普遍性を持つアンデルセンの童話に深く共鳴し、繰り返し絵本(図4)や単行本にも描きました。

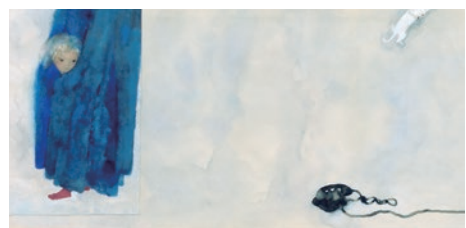
絵本のためのことばがほしい

自分で絵もことばも考えて、絵とことばが一体となった本をつくりたいと思うのです。絵本のためのことばがあっていいのではないのでしょうか。

「わたしの昨日・今日・明日…」『月刊ほるぷ』(ほるぷ出版) 1969年

1968年、ちひろは至光社の編集者・武市八十雄とともに、「絵本にしかできないこと」を求めて実験的な絵本づくりを始めます。1作目の『あめのひのおるすばん』(図5)では、「雨の日」「留守番」などの大まかなプロットをもとに絵を描いて構成し、短いことばをつける手法で少女の心の世界を描き出しました。「すべて自分で考えたような絵本をつくりたい」と思っていたちひろは、編集者とともに、自ら文や構成も考える絵本づくりに意欲的に取り組み、絵本が持つ可能性を追求していきます。イメージや感覚を重視した試みは、日本の絵本に「感じる絵本」と呼ばれる新たなジャンルを拓きました。

本展では、遺されたことばを手がかりに、ちひろの人物像や創作の軌跡をたどります。(宍倉恵美子)

図5 カーテンにかくれる少女
『あめのひのおるすばん』(至光社)より 1968年

ちひろ美術館コレクション 魔法の絵本 = 絵本の魔法

●2026年5月15日(金)~7月20日(月・祝)

主催：ちひろ美術館

「魔法」と聞いて、みなさんは何を思い浮かべますか。「ちちんぷいぷい」「アブラカダブラ」など、魔法の呪文を聞いたことがある方も多いでしょう。人間がとうていできないような不思議なことを行う魔法の歴史はとても古く、世界各地で有史以前から宗教や呪術などと結びついて、探究され、伝えられてきました。神話や昔話のなかには、たくさんの魔法が登場します。そうした伝承をもとに、絵本のなかでも魔法は脈々と受け継がれてきました。本展では、ちひろ美術館の豊かなコレクションのなかから魔法が描かれた絵本、そして、絵本のなかの魔法の魅力を紹介します。

魔女

ほうきにまたがって空を飛ぶ魔女は、ファンタジーではおなじみの存在です。スラブの昔話に登場する魔女「ババヤガー」は、ほうきの代わりに臼に乗り、杵をオールのように使って空を飛びます。森の奥深くにあるババヤガーの住む小屋は、鶏の足の上に建ち、くるくると回転します。迷い込んだ子どもをとらえて食べるこの恐ろしい魔女の姿をさまざまな芸術家が想像を巡らせて描いてきました。2002年に日本からチェコへ移住して絵本制作に取り組んでいる出久根育は、テンペラと油彩を使ってババヤガーのいる情景を描いています。小屋の土台は、白く透ける鶏の羽が円形に重ねられ、ババヤガーが操る白い鳥や糸車と呼応して、縦や横に回転する不気味な動きを想像させます。暗い色調による細密な描写は、魔法の物語の緊張感をリアルに伝えています(図1)。



図1 出久根育(日本)
『マーシャと白い鳥』(信成社)より2005年

こびと

物語絵本には、魔女のほかにも不思議な力を持つ存在が登場します。ヨーロッパ各地の伝承に出てくるこびとも魔法を使います。グリム童話「こびとのくつや」では、こびとたちが、貧しい靴屋の夫婦を助けて、一晩ですばらしい靴をつくります。靴屋の夫婦はお礼に彼らに服と靴を贈ります。イギリスの画家・バー

ナデット・ワッツは、裸で靴をつくる善良なこびとをあたたかなろうそくの光で包むように描いています(図2)。



図2 バーナデット・ワッツ(イギリス)
『こびとのくつや』(西村書店)より1986年頃

『魔法のなべと魔法のたま』では、貧しい夫婦に繰り返し魔法の道具を授けるこびとが描かれています。出久根育も私淑するスロバキアの画家・ドゥジャン・カーライの絵筆は、まさに魔術のように、登場人物たちが重力から解き放たれたように勢ぞろいする場面を緻密に描き出しています(図3)。



図3 ドゥジャン・カーライ(スロバキア)
『魔法のなべと魔法のたま』(ほるぷ出版)より1989年

鬼

日本の昔話にも、不思議な力を操る者が登場します。鬼はその代表的な存在といえるでしょう。『だいくとおにろく』では、ずるがしこくも間抜けな鬼が、だいくと取り引きをして、あっという間に流れの早い川に立派な橋をかけます。赤羽末吉は、民衆に語り継がれ、怖れられながらも愛されてきた鬼を大津絵のようなおらかな筆致で描きました(図4)。



図4 赤羽末吉(日本)
『だいくとおにろく』(福音館書店)より1962年

絵本の魔術師

魔法のように、わたしたちを空想の世界へ連れ出してくれる絵本があります。

チェコのアーティスト、クヴィエタ・パツオウスカーは、紙を切ったり、折ったり、貼ったり、穴をあけたり自在に扱い、物語の世界へと誘う絵本をつくりました。彼女の手にかかるアルファベットや数もいきいきと動き出し、おしゃべりを始めます。彼女が「魔術師」とも呼ばれる由縁はその自由な造形にありま

す。ときには絵本を飛び出し、紙の彫刻となって現れます(図5)。



図5 クヴィエタ・パツオウスカー(チェコ)
数の物語 1990年

ノンセンスの魔法

ノンセンスの魔法で非日常の世界へ旅に出てみませんか。よく知られているノンセンスの物語に「不思議の国のアリス」があります。クロアチアの画家、アンドレア・ベトルリック・フセイノヴィッチは、奇妙な世界に迷い込んだ少女・アリスをコントラストの強い色面と歪んだ空間のなかにとらえています(図6)。



図6 アンドレア・ベトルリック・フセイノヴィッチ(クロアチア)
『不思議の国のアリス』より2002年

日本を代表するノンセンス絵本の魔術師といえば、長新太です。『まねっこねこちゃん』では、どんなものにも変身できる不思議な猫が登場します。鮮やかな色彩とたっぷりとした筆致は、見る人を生理的な快さとともに、子どもの空想の世界へ解き放ちます。(図7)



図7 長新太『まねっこねこちゃん』(文楽堂)より1996年

日の出前や日没後のわずかな時間に、空が美しく彩られる時間は、「マジックアワー」とも呼ばれます。場面で展開する絵本にもマジックアワーを見事にとらえている作品があります。谷内こうたの『なつのあさ』では、早朝から夜更けまで、日の光の変化に応じて、少年の空想の世界が美しく展開します。(原島 恵)

「みる・よむ・体験する」ねりまフォーラム事業 2025年度の活動報告

実行委員会：ちひろ美術館・東京 練馬区立美術館 練馬区立石神井図書館・貫井図書館・南田中図書館
 特定非営利活動法人 手をつなご
 ねりま若者サポートステーション



文化庁 令和7年度 Innovate MUSEUM 事業

ちひろ美術館・東京では、2021年から、近隣の美術館や図書館、子育て支援や、若者の就労支援の団体と協働して、「みる・よむ・体験する」ねりまフォーラム実行員会を結成して活動に取り組んできました（2022〔令和4〕年度の活動報告については東京館美術館だよりNo.217を参照）。

ねりまフォーラムでは、あかちゃんから大人まで、あらゆる世代が気軽に楽しく文化芸術に触れることができる場づくりを進めてきました。5年目となる2025（令和7）年度は、地域のあらゆる方たちが、芸術文化を通して豊かな体験を持続するには、どうしたらよいかを考え、課題を抱える子どもとその家族の存在に焦点をあてました。地域で子どもを見守るまなざしを共有し、絵本をはじめとする文化芸術に触れる場をつくることで、療育を必要とする親子を早期支援し、地域の文化を次世代につなげていければと考えたからです。

療育を必要とする親子とともに

そこで、わたしたちは、杉並・練馬地域で長年にわたり、療育支援に取り組んできたNPO法人I am OKの会に協力を仰ぎました。同会理事長の林田道子さんは、療育を必要としている親子には医療的なケアだけではなく、社会的なケアが必要であること、そして保護者や療育現場の支援者たちを支援することも大切だと指摘します。こうした視点を共有したうえで、2025年7月10日（木）に臨床心理士や作業療法士、言語聴覚士など療育支援の専門家6名をちひろ美術館に招き、鑑賞会と意見交換会を行いました。ゆりかごのような椅子があれば安心できるのではないかと、見るだけではなく、声を出したり、表現したりすることができる空間があると楽しめるのではないかと、といった意見が寄せられました。

療育を必要とする親子を対象にした鑑賞会を開催するにあたり、事前に参加する親子が通所している発達支援の事業所を訪問しました。子どもたちが発達促進プログラムに取り組んでいるようすを見学した後、絵本の読み聞かせなどを通じて交流をしました。また、保護者との対話会からは、普段、絵本に親しんでいても、美術館を訪れる機会が少なく、特別な鑑賞会に寄せる期待が高いことがわかりました。8月25日（月）休館日に開催した鑑賞会には、3組7名の療育を必要とする親子が参加しました。水彩技法体

験ワークショップを行った後、対話しながらいっしょに絵を見る時間を設けました。事前訪問で興味を持ってくれたこともあり、子どもたちは集中して参加することができました。プログラムを進めるにあたり、支援者が持参した残り時間がわかる「タイムタイマー」が役立ちました。自由観覧時間では、子どもたちがそれぞれに図書室や、おもちゃのある「こどものへや」、ショップも利用して、顔を輝かせながら美術館を楽しむようすが見られました。



8/25 療育を必要とする親子を対象にした鑑賞会

また、発達に課題を感じている子どもと保護者に活用してもらえるように、療育の専門家が選書した絵本ガイド「子どもの発達応援BOOK!!! 子どもの心をつかむ絵本」を作成しました。このガイドでは、専門家によるひとことアドバイスとともに44冊の絵本を紹介しています。巻末では練馬区内の図書館や家庭文庫、相談情報ひろばなど絵本のある子どもの居場所の情報を掲載しています。乳幼児を持つ保護者の孤立を防ぎ、子どもたちが絵本を介して地域の人たちとつながるツールとしても活用できるよう近隣の各所に配布しました。

そして、絵本をはじめとする文化による療育を地域に啓発するために、I am OKの会の企画による「発達を支え子どもの世界を豊かにする地域のアートと絵本～体験型シンポジウム～」を11月9日（日）に練馬区立区民産業プラザCoconeriホール3階で開催しました。会場内には手づくりおもちゃや絵描き歌遊び、手品などを楽しめる子どものコーナーと、絵本のある子どもの居場所を紹介する地域の情報コーナー、発達支援の専門家が選書した絵本が読めるコーナーを設置しました。ステージでは、小児科医によるトークや身体を使った読み聞かせなどが行われました。参加者からは、絵本や療育おもちゃを手に取り、支援者と直接話しができて良かったという意見や、発達の課題を親だけで抱え込まず、地域と関わることの大切さを感じたといった意見が寄せられました。支援者や文化施設のスタッフも含め約80名が参加

し、交流することで、実際にネットワークをつくることのできたことは大きな収穫でした。このシンポジウムのようすは、より多くの方に知っていただくために映像として記録し、配信しています。

<https://youtube.be/QySbV1BFeh8>



11/9 絵本育ちをテーマにしたシンポジウム

子どもにやさしいまちづくり

まち全体で子どもを見守り、育む環境が整えば、課題を抱える子どもたちへの社会的ケアも容易に実現するでしょう。こうした問題を地域の人たちといっしょに考えるために、ふたつの市民講座を図書館で開催しました。NPO法人PIECES（ピースーズ）の企画協力のもと、2026年1月10日（土）に第1回の講座「子どもたちの現状と大人にできること」を開催しました。同法人理事の斎典道さんによる「市民性」をキーワードにした地域での子どもとの関わり方についての講演の後、参加者同士で対話する時間をもち理解を深めました。1月25日（日）に開催した2回目の講座では、岡山県真庭市中央図書館館長で、長年、さまざまなコミュニティで子どもの居場所づくりに取り組んできた西川正さんを講師に迎え、豊富な事例とともに、学ぶ場や子どもの居場所をつくるうえでの考え方を伺い、参加者同士で具体的なアイデアを出し合いました。



1/25 市民講座「まちへのまなざしと私にできること」

先進的な取り組みを実践している団体や講師と連携し、気軽に話しあえる場をつくることで、地域で子どもに関わっているシニア・ボランティア、フリースクールのスタッフ、研究者、外遊びの支援者などと課題を共有することができました。2回の市民講座を通じて、参加者から継続した学びの会をつくらうとする自発的な動きが生まれたことも大きな成果です。

これらの事業を通じてうまれたつながりを礎に、今後も文化芸術を通じて豊かな体験を共有できる場づくりを継続していきたいと思えます。（原島 恵）

ひとこと ふたこと みこと



1月11日(日)

ちひろさんは、せんそうをたいけんしている。でもわたしはたいけんしていない。そのさはすごくあるとおもう。でも「えをかいてみたい」というきもちはいっしょだからがんばる。 大日方都 9歳

1月29日(木)

中学3年生の誕生日のときに、担任の先生がちひろのカードにメッセージを書いて、私にくれました。ちょうど、このノートの前に飾ってある「ぶどうを持つ少女」のカードでした。私に似合うからと、先生が選んでくださったそうです。私は今大学4年生になります。先生、お元気にしていますか。今でも、あのカードを大切に持っています。先生があんな絵を選んでいなかったら、私は今日

ここにきていなかったかもしれません。たくさんのめぐり合わせに感謝して生きていきたいです。

T.

3月6日(金)

とても素敵な場所でした。『てぶくろ』のおうちとぬいぐるみの写真も撮れてとても満足です。ありがとうございます。また来ます。 岐阜より Hitomi

3月7日(土)

ちひろさんの絵が好きだった母が、昨年94歳で亡くなりました。最後までかたわらに、ちひろさんの日めくりがありました。母は昭和6年の生まれです。子どものころはずっと戦争で、戦後の暮らしはもっと大変だったそうです。ちひろさんの絵を見ると、いつも母を思います。たぶん、ずっとこの

先もそうだろうと思います。

3月10日(火)

43歳の誕生日、3人の子もたちを見てあげることから好きなのところに行っておいでと母が言ってくれて、今日はずっと来たかったちひろ美術館にきました。3年前には、夫に子どもたちをお願いして、ひとりで安曇野のちひろ美術館にも行きました！子育てが少し落ちついてきて、私もちひろさんのような絵を描きたいと思っています。 もりたあき

3月15日(日)

初めて来ました。『てぶくろ』展がきっかけです。絵にもこんなに種類があることを学びました。デジタル社会に生きている私が、珍しくアナログで良いなと感じた展示でした。 つくば市 山本

美術館 日記

1月14日(水) ☀

東京・安曇野の職員が集まり、各館の取り組みや今後の目標を共有する両館研修を実施。早稲田大学博物館支援サークル「ミュゼさぼ」のメンバーを迎え、10～20代の学生の博物館との関わりについて話を聞くプログラムも。質疑応答も交え理解を深めていく。

2月7日(土) ☁

「令和7年度 学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」成果報告会に招かれる。練馬区内での学びの場の紹介や、学びの多様性や楽しさを体験できる参加型の企画を集めたイベントで、当館はちひろの水彩技法体験で缶バッジをつくるワークショップを行った。29名の参加があり、「とてもよいものができました」「楽しめました」と好評。主催の「NPO

法人障がい児・者の学びを保障する会」は、2024(令和6)年度のねりまフォーラムの活動で出会った団体。美術館がさまざまな人の学びの機会や居場所のひとつになることを目指して交流を重ね、この機会につながった。

2月9日(月) ☀

8日は全国的に雪が降り、今朝は練馬区でも積雪が見られた。中庭の彫刻《ポニーというリトルジョー》(中野滋 1991年)はまるで雪あそびをしているよう。



3月1日(日) ☀

「生誕120年『てぶくろ』の画家

ラチョフと民話絵本の世界」展が始まる。図書室には職員手製の大きな手袋があらわれ、会期中、撮影スポットとして活躍。



3月21日(土) ☀

都内の絵画教室に通う、ロシア語話者の子どもたちが来館。解説を聞いたり、スケッチをしたりしながら鑑賞を楽しんだ。マーヴリナやミトゥーリッチの原画を前に、描かれているロシア語を声に出して読み、翻訳してくれる子も。「『てぶくろ』はみんなの家にある、馴染み深い作品です」といった声も聞くことができ、国を越えた絵本文化の広がりを実感する。



新収蔵 作品紹介⑭

いわさきちひろ
花と洗濯物と親子
1960年代半ば

昨年6月、ご来館のお客さまより声がかかりました。お父さまの遺品にちひろの作品があり、寄贈するので広く一般の方にご覧いただけないか、と。後日、写真を送っていただくと、春の花々の手前に笑顔の子ども、後ろに大人の男女と干された洗濯物、というなんとも楽しげな、そして初めて見る作品でした。ご寄贈者によると、お父さまご自身も絵をたしなむ方で、職場の美術クラブに所属したり、ちひろも信頼していた画家の永井潔に絵を学んだ一時期もあったとか。お父さまが交流のあった松本善明(ちひろの夫)からこの作品を受け取ったのは間違いのないものの、経緯や時期は不明とのこ

とでした。画風から1960年代半ばの絵雑誌などのための作品と推測されます。描かれてから60年以上も大切に保管されていたことに、感謝するばかりです。



さて、やはり60年ほど前のちひろの新情報も、別の方から寄せられたのでご紹介します。《母から聞いた思い出話です。母が出版社勤めだったころ、ちひろさんに挿し絵を依頼するお使いを先輩から

頼まれました。教わった道順通りに行っても、ご自宅が見つからず途方に暮れていたところ、目の前の空き地にたくさんのコスモスが咲いており、そこにいた方が「持っていきな」と両手いっぱいの花束にしてくれました。その後、先輩が最寄りの駅名を間違えていたことが判明し、無事にちひろさんのお宅に到着できた母は、お土産にコスモスの花束を差し上げたそうです。ご多忙なちひろさんは挿し絵の仕事は断ろうと考えていたらしいのですが「こんな素敵なプレゼント持ってこれちゃやるしかない」と、すぐに挿し絵を描いてくれたそうです。》ちひろの笑顔が目に見えます。(中平洋子)

●次回展示予定 2026年7月25日(土)～10月25日(日)

武田美穂展 絵本づくりはドキドキなのだ！

子どもの心に寄り添い、親しみあふれる絵本を描き続けている絵本作家・武田美穂。

本展では、大人気の『となりのせきのますだくん』をはじめ、リズムカルなことばで楽しく料理が進行する『オムライス・ハイ!』、作家・那須正幹の遺稿をもとに戦争と平和を見つめなおす『やくそく』などの原画とともに、絵本制作のための資料も展示し、多彩な表現と人気のひみつを探ります。



武田美穂『となりのせきのますだくん』(ポプラ社)より 1991年

ちひろ 子どもは平和のシンボル

ちひろ美術館の初代館長で劇作家の飯沢匡は、「ちひろが子どもの姿を描き続けたのは、子どもが『平和』のシンボルに他ならないからだ」と語っています。

本展では、ちひろが生涯描き続けたテーマ「子ども」に着目し、そこに込められた想いや背景を、ちひろの絵本や作品から紹介し、あらためて平和の意味について考える機会とします。



いわさきちひろ ひまわりとあかちゃん 1971年

ちひろ美術館・東京イベント予定 各イベントのご予約・お問い合わせは、ちひろ美術館・東京イベント担当へ。

掲載内容は予告なく変更する場合があります。最新情報につきましては、公式サイトをご覧ください。TEL.03-3995-0612 chihiro.jp



〈展覧会関連イベント〉

●学芸員によるスライドトーク

- 日時：5月17日(日) 14:00～15:00
- 参加費：無料(入館料別)
- 定員：30名
- 申し込み：要事前予約(4/17より公式サイト、TEL.にて)

●手話通訳つき 対話型ギャラリートーク

- 日時：6月6日(土) 14:00～15:00
 - 参加費：無料(入館料別)
 - 対象：手話を主要なコミュニケーションの手段とする方(ろう者、難聴者、中途失聴者など)のほか、どなたでも
 - 定員：15名
 - 申し込み：要事前予約(5/6より公式サイト、TEL.にて)
- 展覧会を手話通訳つきで対話しながら鑑賞します。
*本事業の鑑賞サポートは、「東京文化戦略2030」の取組「クリエィティブ・ウェルビーイング・トーキョー」の一環でアーツカウンシル東京が助成しています。

●松本猛ギャラリートーク

- 日時：6月14日(日) 14:00～14:40/15:00～15:40(2回とも同じ内容です)
- 講師：松本猛(ちひろ美術館常任顧問)
- 参加費：無料(入館料別) ○申し込み：不要

●障がいのある方のための特別鑑賞会

- 日時：6月15日(月)
 - ①しずかにたのしめる時間 10:30～12:00
 - ②声を出してもOKな時間 13:30～15:00
 - 参加費：無料(入館料別) ※18歳以下の方、障害者手帳ご提示の方とその介添えの方(1名)は無料
 - 対象：障がいのある方とその介添えの方(1名まで)、通常の来館に不安を感じている方
 - 定員：①② 各回5組
 - 申し込み：要事前予約(5/15より公式サイト、TEL.にて)
- 障がいのある方や来館に不安の方が安心して鑑賞できるように、休館日に開催する鑑賞会です。

●ギャラリートーク

- 日時：6/6をのぞく第1・3土曜日 14:00～14:30
- 参加費：無料(入館料別) ○申し込み：不要

〈会期中のイベント〉

●わらべうたあそび

- 日時：6月6日(土) 11:00～11:40
- 講師：服部雅子(西東京市もぐらの会代表、ほとさん文庫主宰)
- 参加費：500円(入館料別)
- 対象：0～2歳児と保護者
- 定員：10組20名
- 申し込み：要事前予約(5/6より公式サイト、TEL.にて)

●絵本のじかん

- 日時：第2・4土曜日 11:00～11:30
- 参加費：無料(入館料別) ○申し込み：不要
- 協力：NCBN(ねりま子どもと本ネットワーク)



いわさきちひろ 見つめる子どもたち 1969年

CONTENTS 〈展示紹介〉いわさきちひろ「とても素朴なだけけれど たいせつなもの、それが絵本の中にはあるんです。」…②/ちひろ美術館コレクション 魔法の絵本=絵本の魔法…③/〈活動報告〉2025年度 InnovateMUSEUM事業…④/ひとことふたことみこと/美術館日記/新収蔵作品紹介④…⑤

美術館だより NO.228 発行2026年4月22日